



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	女子高校生の子宮頸がん予防行動に関する心理社会的要因：保健行動モデルを使ったワクチン接種行動の検討(全文の要約)
Author(s)	小林,優子
Citation	
Issue Date	2015-03-17
URL	http://hdl.handle.net/2309/139050
Publisher	
Rights	

女子高校生の子宮頸がん予防行動に関する心理社会的要因 —保健行動モデルを使ったワクチン接種行動の検討—

小林 優子

【研究の背景】

近年、20～30歳代の子宮頸がん罹患率、死亡率はともに増加しており、若い世代の子宮頸がん予防は重要な課題となっている。子宮頸がんの主な原因は性交渉によるHPV(human papillomavirus)による感染であることが明らかになり、米国では2006年にHPVワクチンの使用が認可された。我が国では2009年にワクチンが承認され、翌年には、国際動向や疾病の重篤性等を考慮し予防接種法上の定期接種化に向けて、緊急に予防接種を促進するために子宮頸がん等ワクチン接種緊急促進事業が実施された。子宮頸がん予防ワクチンは、HPVに未感染つまり性的経験がなく、免疫力を獲得しやすい10代前半の女子に優先的に接種することが推奨されている。すでに米国をはじめ海外では、思春期の女子をもつ母親、思春期の女子を対象とした研究が多く行われているが、国内においてはワクチン接種が推奨される思春期やその母親を対象とした研究はわずかである。そして、ワクチン接種の意思決定や生涯にわたっての子宮頸がん予防についての教育は十分行われていないのが現状である。また、高校生が任意予防接種を受ける場合の判断と意思決定は、成人とは異なるプロセスや要因が関連していると推測される。

【研究の目的】

本研究の目的は、女子高校生の子宮頸がん予防に向けた健康教育に寄与するため、女子高校生のワクチン接種行動に関わる要因を明らかにし、ワクチン接種行動の意思決定や行動のプロセスを説明する保健モデルを構築することである。

【研究の実施】

本研究は、質的研究と量的研究により構成した。すなわち、国内において高校生を対象としたこの領域の研究は行われていないため、探索的デザインの質的研究を行い、その結果を基に量的研究を行った。量的研究では、実態を明らかにし子宮頸がん予防ワクチン接種の態度尺度を開発し、その尺度を用いて接種行動および接種意向の予測を行った。

研究1 質的研究

1. 目的

女子高校生の子宮頸がん予防ワクチンの接種行動の要因を包括的に明らかにし、生成した概念を相互に関連づけてワクチン接種行動のプロセスを説明することである。

2. 方法

2011年9月に神奈川県内の4つの公立高校の女子高校生1~3年生26名を対象に、半構造化面接でデータを収集した。データはM-GTA (Modified Grounded Theory Approach) 法を用いて分析した。

3. 結果

38概念と8カテゴリーを生成した。カテゴリーは、(1)“子宮頸がんや予防ワクチンに関する知識や情報”，(2)“子宮頸がんに対する認識”，(3)“友達からの影響の受けやすさ”，(4)“異性との交際や性行動”，(5)“ワクチン接種に対する自分の気持ち”，(6)“ワクチン接種に影響する家族要因”，(7)“ワクチン接種のバリアとなる要因”，(8)“接種行動につながる調整力”である。以上のカテゴリーを用いて「女子高校生がワクチン接種を受けるまでのプロセス」を説明すると、まず、女子高校生の“ワクチン接種に対する自分の気持ち”には、“ワクチン接種に影響する家族要因”“子宮頸がんや予防ワクチンに関する知識や情報”“異性との交際や性行動”“子宮頸がんに対する認識”“友達からの影響の受けやすさ”“ワクチン接種のバリアとなる要因”が影響する。しかし、女子高校生の“ワクチン接種に対する自分の気持ち”が何であれ、実際の接種行動には“ワクチン接種に影響する家族要因”が影響し、ワクチン接種を受けたい場合であっても、“ワクチン接種のバリアとなる要因”により接種に至らない場合もある。そして、そのバリアを越えるのに、女子高校生の“接種行動につながる調整力”が大きく関わっていた。

4. 考察

生成されたワクチン接種の要因の多くはHBM(Health Belief Model)の主要素とよく一致しており、接種行動の理論的予測モデルとしてHBMは有望と思われる。そして、“接種行動につながる調整力”は、発達途上の女子高校生にとり重要な育ちつつある能力であり、HBMに組み込まれていない特性であるが、思春期の保健行動の理論化をする上でオリジナルな要因であることが示唆された。

研究2 量的研究

1. 目的

女子高校生の子宮頸がん予防ワクチン接種に関する実態を明らかにした上で、女子高校生の子宮頸がん予防ワクチン接種に対する態度尺度を作成し、ワクチン接種の意向、ワクチン接種行動を説明する保健モデルを構築することである。

2. 方法

2012年1~3月に、神奈川県内の女子高校生1年~3年生約2,600名を対象に自記式質問紙調査を行った。調査内容は、子宮頸がん予防ワクチンの接種状況、接種の意向、子宮頸がん予防ワクチンに関する知識、情報源、子宮頸がん予防ワクチンに対する態度、家族背景、個人的背景などであった。子宮頸がん・予防接種に対する態度尺度の開発は、研究1で生成されたカテゴリーを基に作成した、子宮頸がん・予防接種に対する態度32項目に対し探索的因子分析を行い(主因子法、エカマックス回転)、共通性が0.2より低い項目を削除しながら、因子抽出を行った。その後、探索的因子分析により抽出された因

子構造に対して、確認的因子分析により因子相関モデルの妥当性と各因子の構成概念妥当性を検討した。確認的因子分析は Amos19 を用い、モデルの適合度指標は、Comparative Fit Index (CFI), Goodness of Fit Index (GFI), Adjusted Goodness of Fit Index (AGFI), Root Mean Square Error of Approximation (RMSEA)を用いた。ワクチン接種行動の予測は、子宮頸がん等ワクチン接種緊急促進事業の対象であった1~2年生を分析対象とし、ワクチン接種の意向の予測は、ワクチン接種を受けていない生徒1~3年生を対象とした。ワクチン接種状況、ワクチン接種の意向をそれぞれ従属変数に、態度尺度、個人要因、家族要因、知識を予測変数として投入し単変量ロジスティック回帰分析を行った。その結果、オッズ比が有意であった要因を用いて、HBMの枠組みにあてはめてパス図を描きパスモデルの検証を行った。パスモデルの検証は、①オリジナルHBMのモデル、②<接種に向けた調整力>を加えた修正版HBMのモデルでそれぞれパス解析を行い比較検討した。ロジスティック回帰分析には SPSS19 を、パス解析には M-plus v7.2 を用いた。

3. 結果

1) 接種状況および知識や情報源

子宮頸がん予防ワクチン接種率(1回以上接種した者の割合)は、1年生75.0%、2年生69.2%、3年生5.5%であり、子宮頸がん等ワクチン接種緊急促進事業の対象学年の接種率は高かった。子宮頸がんや予防ワクチンに関する知識については、知識に関する15項目について「知っている」と回答した割合は全体的に低く、子宮頸がんの病気や治療については半数近くが「知っている」と回答したが、HPVやワクチンに関して「知っている」と回答した割合は10~30%であった。子宮頸がんや予防ワクチンに関する情報源は、保護者、テレビ、友達、ポスター・パンフレットで高かった。

2) 尺度開発

主因子法、エカマックス回転による探索的因子分析を繰り返し行い、共通性が0.20未満の3項目を除いた29項目の因子分析から解釈可能な8因子が抽出された。第8因子の因子抽出後の固有値は0.95と通常の基準(固有値1.0)を若干下回っているが、当初想定していた7因子構造と比べて8因子構造とした方が、解釈が容易であった。そこで、本研究では8因子構造を採用した。そして、8つの因子は、<家族の健康意識><ワクチン接種の話題との接触><接種に向けた調整力><子宮頸がんの脅威><ワクチン接種への肯定感と関心の高さ><ワクチン接種への消極的態度・困難感><ワクチンに対する不安><ワクチン接種の時間と費用のバリア>と命名した。8因子のうち、<接種に向けた調整力>はHBMには含まれない要因であり思春期の行動を説明するために重要な要因であることが示唆された。その後、確認的因子分析により8因子モデルの妥当性を検討した。そのモデルの適合度は、CFI=.85, GFI=.91, AGFI=.89, RMSEA=.058(.058-.060)であり、CFIとAGFIは適合の基準値をやや下回ったものの、RMSEAではデータとモデルの良好な適合を示した。

3) パス解析

接種行動の予測では、HBMのベネフィット・バリアの認識とワクチン接種行動の関連は理論どおり、＜ワクチン接種への肯定感と関心の高さ＞が高いほど、また、＜ワクチン接種への消極的態度・困難感＞＜ワクチンに対する不安＞＜ワクチン接種の時間と費用のバリア＞が低いほど接種の確率が高くなっていた。しかし、＜子宮頸がんの脅威＞が接種を抑制するという、HBMの理論と反する結果となった。ところが、＜接種に向けた調整力＞を追加したモデルでは、＜子宮頸がんの脅威＞は＜接種に向けた調整力＞を介し、ワクチン接種の肯定感を高め、バリアの認識を低くすることで接種の確率を上げていた。

ワクチン接種の意向の予測では、意向に影響する有意なパスは＜ワクチン接種への肯定感と関心の高さ＞と＜ワクチンに対する不安＞、「学年」のみであり、HBMの特徴的な要因である“病気の脅威”や“行動のきっかけ”にあたる要因は接種の意向に有意な関連を示さなかった。ところが、＜接種に向けた調整力＞を追加したモデルにより、＜子宮頸がんの脅威＞や「保護者の意見」、「家族の接種」などの“行動のきっかけ”にあたる要因が見いだされた。

接種行動の予測、接種の意向の予測ともに、＜接種に向けた調整力＞を加えることで説明率に大きな変化はみられなかったが、要因同士の関連をより詳細に説明することができた。また、＜接種に向けた調整力＞は、「知識」や＜家族の健康意識＞などにより影響を受けることも明らかになった。

【おわりに】

思春期の保健行動には＜接種に向けた調整力＞が重要であることが明らかとなった。そして、女子高校生が主体的に子宮頸がん予防行動に関心を持ち、ワクチン接種の意思決定を含む予防行動をとっていくための健康教育上の課題として、保護者も含めた正しい知識を伝えることや、女子高校生の自律の一側面である＜接種に向けた調整力＞をどう育てるかも課題であることが明らかになった。本研究は、定期接種化される直前で、子宮頸がん等ワクチン接種緊急促進事業が実施されている時期に調査を行ったものである。その後、子宮頸がん予防ワクチンは定期接種化されたが、重篤な副反応の報告などから現在では積極的勧奨を差し控えるとの勧告がなされている。したがって、現在では接種の意向や接種行動の状況は大きく異なることが予測される。女子高校生の子宮頸がんワクチン接種行動や別の保健行動を説明するモデルとして適用するのか、今後検討を試みたい。